教育講演 2



これからの理学療法教育
―臨床実習教育への提言―

兵庫医科大学アドミッションセンター
日髙 正巳

【はじめに】

理学療法士養成施設の指定規則改正に伴い、臨床実習教育には大きな変化の波が寄せられている。従来の「症例担当型実習」から「診療参加型臨床実習」への移行は、単なる制度上の要請ではなく、臨床現場におけるコンプライアンス遵守の観点から見ても必然の流れである。無資格の実習生が診療に携わる以上、有資格者の監督下で「臨床チームの一員」として参加する形態への転換が不可欠となっている。診療参加型臨床実習の背景ならびに臨床実習展開について紹介する。

【実習の本質と学習理論】

診療参加型臨床実習の基盤には、正統的周辺参加、認知的徒弟制、経験学習モデルといった教育学的な背景理論が存在する。対象者にとって意味のある診療の場に段階的に参加させ、有益な経験を蓄積させる「育てる」実習の本質を理解することが重要である。具体的には、実習生が「見学（Modeling）」「模倣（Coaching）」「実施（Fading）」の認知的徒弟制のプロセスを踏み、周辺業務から次第に理学療法の中核スキルへと関与を深めていく正統的周辺参加に基づいた指導計画に基づいた臨床実習展開が求められる。

【多様性と個別性の理解】

一例を症例報告としてまとめて終わらせる実習スタイルは、もはや「過去の話」としなければならない。単一の症例に固執することは、かえって臨床推論の幅を狭め、学びの水準を下げる恐れがある。運動器疾患は、同一の診断名であっても、受傷起点、重症度、合併症、そして生活背景などにより、その臨床像は多様な像を呈する。この「個別性」ならびに「多様性」を理解するためには、症例比較、すなわち複数の症例を経験し、それらの類似性と相違点を整理するプロセスが不可欠である。複数の対象者から共通点と相違点を抽出する経験こそが、運動器理学療法に必要な臨床能力を高める鍵となる。

【形成的評価に基づく指導計画】

実習生の評価においては、実習終了時に合否を判定するような「総括的評価」ではなく、日々の成長を捉える「形成的評価」が中心となる。指導者は、実習生の能力に応じて「適正な負荷」を設定し、形成的評価の結果を次の指導計画へ反映させる STPD サイクルを回すことが有益なものとなる。

【おわりに】

実習指導者と実習生、養成校の教員が意識を改革し、学習理論に基づいた診療参加を展開することで、次代を担う質の高い臨床家の輩出につながるものと確信している。

略歴

【学歴】
1990 年　神戸大学医療技術短期大学部理学療法学科卒業
2000 年　佛教大学大学院教育学研究科生涯教育専攻修了
2004 年　神戸大学大学院医学系研究科修了

【経歴】
1990 年　理学療法士免許取得、医療機関勤務
1997 年　神戸大学医学部保健学科助手
2002 年　吉備国際大学保健科学部助教授（2006 年同教授）
2007 年　兵庫医療大学リハビリテーション学部教授
2022 年　兵庫医科大学アドミッションセンター教授

【学会活動】
2015 年　一般社団法人全国大学理学療法学教育学会理事
2021 年　一般社団法人日本理学療法教育学会理事長